

第99回『わかるように伝えてますか』

香川大学 坂井 聰

前回からの続き、合理的配慮としてのICTの活用についてです。

二点目は、「ICTの利用によって、子どもの自身が学ぶ努力をしなくなるのでは」というものでした。これは、対象となる児童生徒の学習意欲によるものが大きいと考えられます。ICTの利用は、努力したらできることを、努力せずにできるようにするものではないということを共通理解したいものです。ICTの利用は努力してもできないことを、できるようにするためのものなのです。言い換えれば眼鏡と同じように利用するものだと言えるでしょう。視力が少し弱いために黒板の文字を見ることができない場合、視力に応じた眼鏡をかけ黒板が見えるようになると、学ぶ努力をしなくなるものだと思いますか？むしろその反対で、見えるようになったことで、興味関心や意欲につながり、努力することになることが多いのではないかと思うのですが、どうでしょうか。書字に困難があり、何十回練習しても書けなかった子どもが、先生から「いつかできるようになるから、書けるようになるまでがんばって練習をしましょう」と言われて、本当に意欲的に練習するようになるでしょうか。繰り返し練習してもその効果が見られないのであれば、意欲を無くし、自信も無くすのではないかと思うのですがどうでしょうか。一方、これまで何十回も練習してできなかつたことが、支援技術の導入でできるようになったらどうだろうでしょうか。これまできれいに書くことができなかつた文字が、きれいに書けるようになります。見えなかつたものが見えるようになるということなのです。「これならできるかも」と考えることができれば、学びに対する意欲や自信を育てることにつながるのではないかと思うのです。

しかし、そこには前提が必要だと考えられます。それは、子ども自身が、自分の夢や希望を叶えようとする意欲があるかどうかということです。子ども自身の夢や希望を育てる教育を普段からしておかなければならないということです。何をやってもぼくはできないというように、自己肯定感が低い状況では、うまくいかないのではないかと思います。ICTの利用は、特別な支援を必要とする児童生徒を同じ土俵の上にあげるための手段であって、本来持っている力を引き出すための手段なのです。それを使うことが児童生徒の持っている能力を大きく伸ばすものではないということも理解しておかなければならぬと思います。

～坂井聰先生の紹介～

((プロフィール))

香川大学教育学部卒業 金沢大学大学院教育学研究科修了、香川大学教育学部附属養護学校など養護学校教諭を経て、現在香川大学教育学部障害児教育コース准教授。1997年には自閉症のコミュニケーション指導で辻村奨励賞受賞。2013年より教授に就任。

((著書))

暮らしの中のコミュニケーション（やまびこの里）、クラスルームコミュニケーション（こころリース出版社）、
自閉症や知的障害をもつ人とのコミュニケーションのための10のアイデア（エバーベント研究所）など